

実践報告 (Practical Research)

# 複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例

荒川 歩・安田 裕子・サトウタツヤ

(武蔵野美術大学造形学部・立命館大学衣笠総合研究機構・立命館大学文学部)

## A Method for Analyzing with Trajectory Equifinality Model

ARAKAWA Ayumu, YASUDA Yuko and SATO Tatsuya

(College of Art and Design, Musashino Art University/  
Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University/  
College of Letters, Ritsumeikan University)

The paper introduces a method to make a figure of Trajectory Equifinality Model (TEM) for cases when making figures based on interviews with some people is warranted. The method is not “a standard”, or “right method”, but only a method to understand the TEM analyzing process for beginners. In this paper, we introduce an analyzing process of “the process of becoming a best friend” based on KJ method. The method includes 8 steps: transcribing and reading the interview carefully, segmenting, determining a time line for each person’s segments, positioning similar experience and labeling, determining out bifurcation point, drawing lines between points, and considering appropriate labels, checking the traceability of each interviewee, & writing the paper. In addition to the method, we discussed some tips to improve beginners qualitative research, which includes referring the risk of pursuit when acquiring “procedure to qualitative analyze.”

**Key Words** : Trajectory Equifinality Model (TEM), qualitative research, education technique

キーワード : 複線径路・等至性モデル (TEM), 質的研究, 教育法

### はじめに

実験室における真実追求から、現場での現象や対象者を理解するために手掛かりとなる概念の創出に、心理学の関心が広がるに従い、質的研究法の需要が高まっている。質的研究の中で、時間を捨象せずに扱おうとする複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: 以下 TEM) (サトウ・安田・木戸・高田・ヴァルシナー, 2006) もその中の1つである。TEM図の基本

的概念は示されてはいる(サトウ, 2009)。しかし、TEMは、KJ法(川喜田, 1967)やグラウンデッド・セオリー・アプローチ(グレイザー・ストラウス, 1996)などの他の質的研究法と異なり、「標準」的な分析手続きが存在しないばかりでなく、分析手続きを解説したものも見当たらない。また、質的研究にはいろいろなやり方があり、最終的には研究目的に合わせて自分なりの方法を見つけ出すのが好ましいとはいえ、初めてTEMに取り組む人は、予想もつかないであろう。そこで、本稿では、複数の人を対象としたインタビュー

から TEM 図を作成する場合を想定して、TEM 図の作り方の一例を紹介する。ここで紹介する方法は、標準であるわけでも、「正しい」やり方であるわけでもない。1つの例として、TEM で分析するプロセスを体験することを意図するものである。

## 1. TEM で何ができるか

### 1-1. 質的研究法や TEM では何ができるか

実際に TEM を用いた分析を想定してデータを取る前に、TEM で何ができるかを理解しておく必要がある。TEM は質的研究法に含められるツールの1つであり、ツールにすぎないが、多くのツールがそうであるように、うまく目的に合わせて使えば、人間の認識の幅や表現の幅を広げてくれるものである。大事なのは研究目的であるから、自分の研究目的に TEM が合致すると考えるなら、TEM をツールとして用いるべきだろう。

ただし、その人が研究開始前から見たいものが研究結果として見えたとか、主張したいことが裏付けられた、というような主張を質的研究によって行うなら、その人の研究は恣意的な研究であるとして低く評価されることになる。質的研究法は、何かの主張を必然的に答えとして導き出してその答えが正しいとお墨付きを与えるものではないし、未来を予測するすべを与えるものでもない。質的研究法をうまく使えば、視点を増やしたり、理解を深めたりすることはできるが、その視点やその理解の仕方が他に比して正しいと証明するものでもない。質的研究法初心者の中には、質的研究法に自分の主張を「実証する」手助けを期待する人は少なくない。また、量的研究法について教わったように、データを決められた手順で操作すれば、自動的に客観的で一般化可能な答えが抽出されると期待する人も少なくない。しかし、残念ながら、TEM

をはじめ質的研究法は、多くの場合、このような期待に答えることはできないのである。質的研究法の背景には、人は、自分の知りたいと思っていることや知っていることしか認識できないという問題があり、質的研究法は、人間の認識の限界を拡張することに重きが置かれて用いられる。この目的のために、質的研究では、「現場や当事者、現象にできる限り寄り添う」ことで、自分の思い込みとは異なる視点のありように気づこうとする。

このような質的研究法の意義が心理学の世界に、十分広まっていなかったため、TEM を使った分析を発表する時、あるいは学会誌に TEM を投稿しようとするとき「こんなわずかな事例から得られた結果を一般化できるのか」という問いは、最初になされる問いの1つであろう。先に書いたように、TEM を含む多くの質的研究では一般化を目指したりしない。変数を設定して抽象化するような研究ではなく、具体的な時空における人間を対象にするからである。知識には、一般化して予測することが有効な場合と、対象の理解を深めたり、起りうる可能性について考察を深めたりするだけで十分な場合がある。TEM を含む多くの質的研究では、後者の目的で用いられる。よって、今回とは違う別の人に話を聴いていたら別の結果になった可能性はあるし、同様の現象を捉える際にも人によって焦点のあて方が異なるだろうし、同じデータであっても別の人が分析したら別の TEM 図になる場合だってあるだろう。しかし、少なくとも、そこで語られた(と面接者が聴き取った)ことは「事実」であり、そこから離れずにモデルが作られているなら、それから(典型的であるかどうかは別として)対象に対する1つの理解の仕方を読み取ることは乱暴なことではない。このような質的研究の知見は、いわゆる量的研究の目的とは異なる。量的研究を主として行っている人には、このような種類の知見にも意義があると

は想像が難しいことであるかもしれないが、哲学から近代心理学が分岐したときにも理解されないなか、先人達は道を切り開いていったのである。

このような性質を持つ質的研究をあえて用いるのには理由がある。質的研究では、人間の Life（命・生活・人生）について—それを要素に分けたり測定したりせずに—その意味を包括的な視点から丁寧に記述することができる。多くの心理学の研究は、人間の内部に変数を仮定し（しかも恣意的にいくつでも増やすことができる。これまで一体何種類くらいの変数が心理学で使われただろうか？）、変数と変数の関係を記述することで研究を成就する。人間の Life 全体的な理解などはほぼ無視されており、時間的な経緯もほとんど考えられていない。

では TEM で何ができるのだろうか。TEM は、等至性（Equifinality）の概念を文化心理学や発達心理学に取り入れようとした Valsiner（2001）の創案に基づく。個々人がそれぞれ多様な径路を辿っていたとしても、等しく到達するポイント（等至点）があるという考え方を基本とし（安田，2005）、人間の発達や人生径路の多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みモデルである（図 1）。図 1 の等至点（Equifinality Point: EFP）は収束するポイントとして、分岐点（Bifurcation Point: BFP）は分岐するポイントとして描かれる。非可逆的時間（Irreversible Time）とは、時間の持続を示す概念である。この概念に、必須通過点（Obligatory Passage Point: OPP）がある。必須通過点は、ほとんどの人が、論理的・制度的・慣習的・結果的に経験せざるを得ないポイントとして示される（サトウ，2009 前出）。

TEM が拡張するのは、時間である。時間が持続するなかでの対象や現象の変容プロセスを捉えるのである。KJ 法やグラウンデッドセオリー

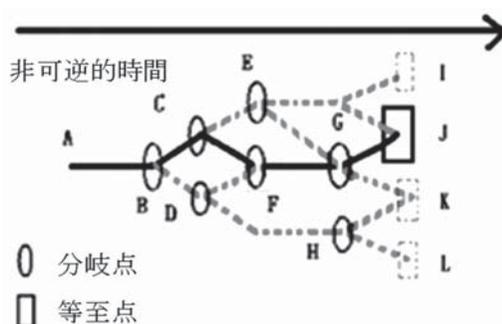


図 1 TEM 図

などの研究法と組み合わせることで、これらの方法の利点も活かすことができる。

### 1-2. 何人のデータが必要か？

TEM で分析することに決めたのなら、どれくらいデータを扱うかを考える必要がある。TEM は、1 人のデータでも多人数のデータでも扱うことができる。1 人のデータによる TEM は、多人数の TEM に比べて現象を詳しく記述することができる。たとえば文化的・社会的背景によりかかる諸力を盛り込み、選択肢を相対化してオプションを示すために使われるだろう。複数データによる TEM は、多様性と共通性を示すことができる。ある状況にある人たちは当然同じような経験をしてきており、またこれからも同じような経験をするだろうという、してしまいがちな理解が誤解であることを示したり、あんなに違う生き方をしている人たちのなかにある局面において同じような体験をしていることを示したりするのに役立つだろう。

TEM はサンプリング方法としての歴史的構造化サンプリング（Historically Structured Sampling: HSS）（Valsiner & Sato, 2006）に依拠する。人の経験は歴史的・文化的・社会的な文脈に埋め込まれ構成されているという認識のもと、同じ経験をした人を選ぶ、ということである。厳密に言えば「同じような」経験をした人、である。ここで同一の経験はあり得ないと考え

ることも可能であるが、理論上・実践上の緩やかな同一性を設定することで、その経験の多様性の幅が捉えられ、研究知見に意味を持たせることができるのである。

よく問われる問いに、何人のデータを取ればいいですか？というものがある。

経験則的に、1・4・9の法則を提案することができる（サトウ・安田・佐藤・荒川, 2011）。1人の話を分析すれば深みが出る、4人の話を分析すれば多様性が見える、そして9人の話を分析すれば径路の種類ができる、ということが経験的に言えると思われるのである。このことは、2人の話を聴いても1人の時よりも深みをもった分析ができるわけではなく、多様性も中途半端にしか捉えられないということ、6人の話を聴いても4人の時よりも多様性が豊かになるわけではなく無秩序を表しかねず、かつ径路の種類までは見えないということを示している。1の2乗、2の2乗、3の2乗、という語呂の良さもある。もとより経験則でしかなく、また、現実の制約から必ずしもその数を満たせないこともあるが、目安として表1のようなことを考えておくこともよいだろう。

データの人数が多すぎて処理が難しい時の対処方法はいくつかある。第1は、必須通過点を設定して、その必須通過点を通った人を対象として絞る方法である。第2は、初期条件の違い（後述の、親しい友人の例では男性と女性）や、特徴的な経験（同じく、引越越し経験の有無など）ごとにわけて分析・比較する方法である。ただし、この場合、TEM図の差異を属性の差異と判断するのは適切ではない場合がある。第3は、

まずある程度類似性がある3人か4人くらいのデータで分析をして見通しを立てて、その後（それらのデータをバラして）全データを対象に再度分析する方法がある。第4には、まずある程度類似性がある3人か4人くらいのデータを分析して、そこで作られたモデルにその他のデータから得られる知見を加えていく方法である。第3の方法の場合も第4の方法の場合も元のラベルや構造にむりやり「分類する」のではなく、柔軟に元のラベルや構造を組み替える姿勢が必要である。

また、同じ人に1回よりも、複数回聴く必要を感じる人もいるかもしれない。1回限りのインタビューと、1回目のインタビューをもとに暫定的なTEM図を作成して2回、3回とインタビューすることは、それぞれメリットとデメリットがあり、目的にあわせて行うことが好ましい。1回のやりとりを所与のものとして、そこから何らかの意味を発見するという意味では1回で十分であるが、研究協力者の視点を丁寧に読みとるという意味では、同じ人に2回、3回とインタビューすることに理があるだろう。

なぜなら最初に人と会う時、それは即ち初対面であるからである。初対面の人からどれだけ話を聴くことができるのだろうか。調査の依頼をして承諾してくれた人であるから、それなりには可能であろう。しかし一般論として、捉えられる内容の深まりを期待するのは難しい。2回目会うことができれば、お互いに前の印象が残っている。そこで初回では話されなかったことが聴けることもあるだろうし、聴けなかったり尋ねもらしたことを確認することもできる。

表1 「何人を対象にして話を聴くか」についての経験則とその利点

インタビュー対象者数	利点
1人	個人の経験の深みをさぐることができる
4 ± 1人	経験の多様性を描くことができる
9 ± 2人	径路の種類を把握することができる

そして、そうして捉えられた内容の全体像を、改めて確認するのに3回目に会うことができるとなおよいと考えられる。

2回目や3回目のインタビューの際、前回のインタビューを分析して描いた TEM 図を媒介にするとよいかもしれない。作成した TEM 図をツールにしてインタビューを行うことによって、分析の適切性を、まさに当事者目線で確認することができる。また、そのやりとりを通してリフレクションが深まり、「あの時こういう選択もあったのかもしれない」「こういう道がないわけではなかった」など、可能性としてあり得た選択肢や径路が追加で語られることもあるかもしれない。インタビュー（Inter-view）は語り手と聴き手の間（inter）でものの見方や視点（view）が拡張される営みであるが、TEM 図を介して語り手と聴き手の視点の「融合」がなされる有り様はトランスビュー（Trans-view）（サトウ他、2011 前出）であるということができよう。

インタビューで話を聴き TEM 用のデータを取得するなら、可能な限り、出来事が起きた時間と場所を意識してもらうことが重要である。また、何かを選択するような時があったかどうか、その際、他の選択肢はあり得たかどうか、その時にその選択を妨害する力はあったか、それを促進する力があったか、などについても聴けると良いかもしれない。もちろん、自分の経験を最初から時系列的に語れる人は殆どいない。インタビューでは、語られる内容が時間的に行ったり来たりするので、その前後関係をインタビュー中あるいは事後に確認するなどして時間的な順序についてはっきりしておく、後でまとめやすい。複数回面接するのは、そうした確認を行いやすくするというメリットもある。なお、ここではインタビューに限定して述べているが、TEM は、インタビュー以外にもフィールドワーク的なデータ収集によって得られたデー

タに対しても適用することができる。

### 1-3. 分析の視点

本稿では、 $4 \pm 1$  人程度のデータを扱って TEM 図を作ってみるプロセスを紹介する。これは初心者練習として分かりやすいということから設定した。既に述べたように、1人、 $4 \pm 1$ 人、 $9 \pm 2$ 人、で得られる結果の質は異なるので、実際に研究を行う際には何人にインタビューするかを自身で決めてほしい。先の表1で示したように、 $4 \pm 1$ 人程度のインタビューを行うと、等至点に至る径路に生じる多様性を描くことが可能になる。

複数人のデータがあれば、経験を抽象化する際に気づきや抽象化のアイデアを得ることができ、また、切片化する際に切れ目に気づきやすくなるメリットもある。他方で、多すぎるデータは、整理するのが大変で、見通しを立てて作業することを困難にする。

以上のような議論をふまえ、本稿では主に4人のデータを扱って初歩的な分析の訓練をする例を紹介していく。

ここで使う模擬データは、「お互い知っていたがしゃべったことはなかった。そのうち、同じ感性なのに気づき、仲良くなった。それ以来、一緒にいると楽でいつも一緒にいた。しかし、引っ越してしまい、関係が途絶えた。でも5年生の時に戻ってきて再び仲良くなった。中学校も同じだったが、中1の時、先輩とけんかになりそうになったのを、体を張って止めてくれて、以来、友人として尊敬している。2人とも受験に失敗したが、翌年には、一緒に合格し、別の大学に進学したが、地元に戻ったときには一緒に遊ぶ」のようなインタビューのメモに基づくものである。なお、プライバシー保護の観点で、上で紹介している事例を含め、内容は本質に関わらない範囲で改変を加えている。

## 2. データの TEM 図化

### 2-1. データを文字にして丁寧に読もう

インタビューは、許可をもらえない場合もあるが、可能であれば録音するのが望ましい。そして最初に行うべきことが文字起こしである。文字データに起こすのが面倒であるために、録音を聞きながら一足飛びにラベルとなるキーワードだけを抽出してしまいたいと思うかもしれないが、文字にすることで、(イントネーションなどの情報を失うのと引き換えではあるが)要約したり、印をつけたりすることが簡単になり、全体を見渡しやすくなる。文字に起こす際には、TEMで分析する場合、会話分析のような精度で記述する必要はないが、余裕があれば、読み返した時に、対象者の話し方が思い出せるようにしておくのがよい。

データを文字化したら、それをプリントアウトしよう。パソコン上で見える範囲は、プリントアウトを机の上に広げた場合に見える範囲よりも狭く、またその後の作業にも差し支えるので、パソコン上で作業をやらないほうがよい。

プリントアウトしたら、全データをまず一通り読んでみる。そのうえで、内容や筋立てが理解できるように精読する。

以下では、「今までの人生で特に仲の良かった同性の友達と出会ってから、特別な仲(親友)になるまで」ということを研究するために、4人に対してインタビューを行った場合を主たるサンプルとし、必要に応じて、その他の事例も交えながら考えていく。

### 2-2. 切片化しよう

切片化は、それを行わない方法もあり、そこには理論的な理由も存在する。だが、私たちは丁寧に読むためにも、あるいは、様々な視点から読むためにも、切片化は必須であると考える。

切片化とは文字データを意味のまとまりごと

に分節化していくことである。具体的にはプリントアウトしたものを、まとまりごとに切っていくことで実現できる。

普通は2つのやり方がある。①話し手の主題はある程度無視して事象ごとに切り出していく(たとえば「野球部でなじめていないようなので」/「陸上部に誘う」)か、②ボトムアップに話し手の語ろうとしている主題ごとに切っていく(「野球部でなじめていないようなので陸上部に誘う」という具合である。

ただし、こうした、事象ごともしくは話し手の主題ごとに切り出していくというやり方がうまくいかないこともある。なぜなら、第1に、研究で扱えるのは人生の中の一側面の変遷だけであり、人は、その一側面についてだけ生きているのではないからであり、第2に、研究対象ではない出来事(たとえば、病気)によって研究対象としている経験(たとえば、旅行)の意味づけのレベルが変わってしまうことがあり、人生を変えるような出来事を経験する以前は、それ以降のことを予想して生きているわけではないので、時系列に並べても記述のレベルが合わないということが起こる。たとえば大きな病気をして病院から出られずにいるなら、それ以前の夢や将来の見通し(たとえばどんな新しい場所に行くか)とは異なる次元に関心(自分の病気はどここの国なら行けて、そこで今の自分に何が楽しめるか)が移ることは自然なことである。そして、第3にインタビューの中で話し手は脱線することがあり、また、直前に聴かれたことに回答しようとして、研究目的上その問いがどのような意味をもっているのかを考えないかもしれないからである。このように、事象ごともしくは話し手の主題ごとに切り出すと、全体の見通しが悪くなってしまうと気づいた時には、③研究のテーマに鑑みて、対応した区切りを抜き出すのも1つの手である。

初めて質的研究に取り組む人は、抽象度の高

い概念で事象を捉えがちなので、もしどうしたらいいかわからないのであればまず①のつもりで切り出し、次の並べる段階で、うまくまとまるように②を考えながらやってみる方法がお勧めである。③の方法で全体を整理しやすくする1つの方法として、この段階で必須通過点を決めるやり方もある。必須通過点に対するプロセスとして個々の事象を整理しやすくなるだろう。

なお、文章を切片化する際には、誰が語ったいつのデータの何番目の切片なのかがわかるようにしておくで後で便利である。

### 2-3. それぞれの人の経験を時間順に並べてみよう

複数の人（あるいは複数回のデータ）を1つの TEM で分析する場合、切片化されたデータを、その調査協力者が経験した順にそれぞれ横一行（左から右）に並べよう。話した順番ではなく、それが起こった順番で並べる（図2）。

この際、1つのやり方では、この時点で、暫定的に等至点を設定し、分析過程で必要があれば、柔軟に等至点を微調整する（第2著者のやり方）。同じ経験（ここでは「ある人と親友になる」）をした人に対してインタビューをしているのであり、それを等至点として設定することになる。同じところに到達するまでに、いろんな

ことがあるのだなあと思うようなデータもあれば、意外に皆同じ経験をしているんだなあと思うようなデータがあるかもしれないが、いずれにせよ、まずは個人としての時間の流れをおさえておきたい。また、等至点とは逆の現象（両極化した等至点、ここでは「親友にならない」）を意識しておくことが必要である。研究目的は1つのことに絞られており、そのことを、誤解も含めて良いとか悪いとか価値づけてしまいがちであるが、両極化した等至点を意識することで、その危険性を和らげることができる。

ただし第1筆者は、この時点では等至点は設定しない。第2著者のやり方として示したように、分析していくと等至点そのものが、当初予想したのとは違う性質であることに気づくことがあるからである。

### 2-4. 同じような経験を同じ列にそろえて、ラベルを考えよう

先の段階では、縦方向の事象の並びには何の関連性もない。経験されたと語られた事象が起こった順序で横一列に並べたにすぎない。しかし順番こそ違え、複数の人に同じような経験があるはずである。Aさんの2つ目の事象（同じ感性なのに気づき、仲良くなる）が、Bさんの3つ目の事象（2人とも同じ種類の犬を飼って

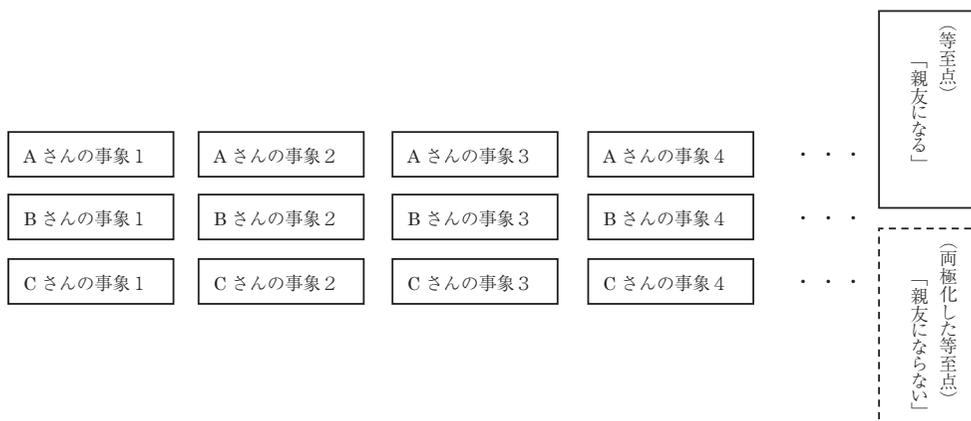


図2 それぞれの人の経験を時間順に並べよう

るのに気づく)と似た経験であることもあろう。Cさんの4つ目の事象として、中1の時卓球部で出会って仲良くなったことが並ぶかもしれない。その場合、Aさんの2つ目の事象以降をずらしてBさんの3つ目の事象と同じ列に並ぶようにする(図3)。さらにCさんの「中1の時卓球部で出会って仲良くなった」という経験もあわせる。このとき、年月日や時刻、年齢など物理的時間(クロックタイム、カレンダータイムともいう)は同じである必要がない。

この作業を繰り返す。つまり、似たような機能をもつ出来事を重ねていくのである。結果としてある人のデータの前半部分はスカスカで、後半部分はつまるような構造になっているかもしれない。また別の人のデータはその逆かもしれない。この際、次の段階であるラベルづけが意識されるだろう。先の例でいけば、「同じ感性なのに気づき、仲良くなる」「2人とも同じ種類の犬を飼っているのに気づく」「中1の時卓球部で出会って仲良くなった」の3つの経験を1つのラベルで表すことである。

なお、事象は違っても、相互に排他的な事象が語られている場合には、それも縦に同じところに並ぶようにしておいておく。これらは、後に設定する分岐点から分かれゆく経験として記される。そのために、横の列(1人の人の横一列の事象の並び)は崩してもよい。たとえば、「お互い知っていたがしゃべったことはない」と「小5の時転校してきて話すようになる」は、出会い時の対話の分岐を示しているため、同じ縦の列に並べるということである。逆にいえば、1人の経験として並存しうる経験(たとえば、「小5の時転校してきて話すようになる」と、「共通

点を発見し仲良くなる)を、縦に並べてしまうと、時間的に同じポイントであるように見え、時間の流れがわかりにくくなる。

下の図3で、Aさんは2つ目の事象として(後に特別に仲良くなることになる友達と自分が)同じ感性なのに気づき、仲良くなったと語り、Bさんは3つ目の事象として2人とも同じ種類の犬を飼っているのに気づいたと語っている、というような例であり、上下の同じ列に並べている。

並べ終わったら、類似した内容のものをまとめ、ラベルをつけよう。最初から順番に、同じ経験だと考えた事象をボトムアップにまとめてラベルをつける。Aさんの事象2(同じ感性なのに気づき、仲良くなる)とBさんの事象3(2人とも同じ種類の犬を飼っているのに気づく)とCさんの事象4(中1の時卓球部で出会って仲良くなる)の場合なら、まとめて「共通点を発見し仲良くなる」にする。この際、ラベル名が抽象的になりすぎないように注意する。「共通のこと」だけでは何のことかよくわからない。具体的に、できるだけデータの中で使われている表現(言葉)を取るようにする。一般的に、外側からの評価ではなく、当事者の言葉/目線を活かすことが重要である。ここで、ボトムアップにラベルをつけるという先の説明と矛盾するようだが、ラベルをつける際に、一旦ボトムアップにラベルをつけた後、研究や全体のTEM図の見通しから、ラベルをその位置になじませるように、表現(言葉)を変更する必要がある。

このようにラベルを設定していく際に、3種類の問題が起こることが多い。第1は、事象の順番の入れ替わりにどう対応するかという問題

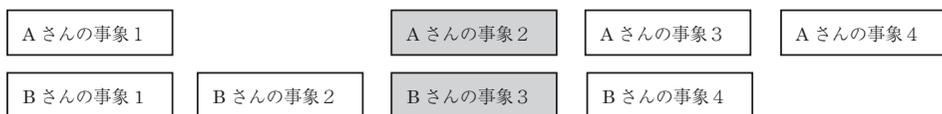


図3 同じような経験を同じ列にそろえて、ラベルを考えよう

である。ラベルをつける際に同じ事象、たとえば「体験の共有」を、Aさんは、図3の事象2の前に経験したと話し、Bさんは事象3の後で経験したと話すかもしれない。この場合、安易に前か後にまとめてしまうのは好ましくない。なぜなら同じ経験でもその時の状況で異なる意味をもつこともあるからである。たとえば、この文脈を離れて「給食を一緒に食べる」ということについて考えてみよう。給食を一緒に食べるという同じ経験でも、友達になる前と後では経験として全く異なる場合がある。給食を一緒に食べる、ということが異なる意味をもったことを明らかにするため、「給食を一緒に食べる」ということを繰り返し描く必要がある場合もある。そのため、「1人で散歩する」という出来事の友達になる前後での意味の違いがTEM図において重要なのであれば、2つの「給食を一緒に食べる」経験の差異がわかるように、TEM図に一見同じ出来事を2回書き込む必要がある場合がある。第2の問題は、繰り返される事象をどう記述するかということである。1つの方法は、時間経過に沿って社会的方向づけなどを矢印として複数記述し、事象が繰り返される有り様を記述する方法であり、もう1つの方法は、TEMで記述されているレベルとは異なるレベルで出来事を生起させている下位または上位システムがあるのだと考えて、その部分に焦点をあてて別のTEM図で記述することである。安田・荒川・高田・木戸・サトウ（2008）は、未成年女性の中絶経験の研究の中で、本人の経験のTEM図とは別に、その経験を支える異なる位層のシステムとしてパートナーとの関係の変遷についてTEM図を作成している。

第3の問題として、一見関係のないように思える切片をどう扱うかということがある<sup>1)</sup>。これ

1) 都合のいい情報だけを取り出すのは、質的研究において特に避けるべきことである。一見意味が分からないものでも、前後の文脈からその事象を語ったその人の意図や気持ちをよく考えることが

は質的研究に共通する問題であるといえる。

## 2-5. 分岐点を考えよう

たとえば、名前で呼ぶという経験が重要であるなら、名前で呼ばないという経験も考えられる。名字で「〇〇くん」とど他人行儀に呼ぶということである。そうであると、名前で呼ぶ経験の前には、おそらく、名前で呼ぼうかどうか、迷いがある時期があるのではないかと考えられる。それが分岐点である（図4）。

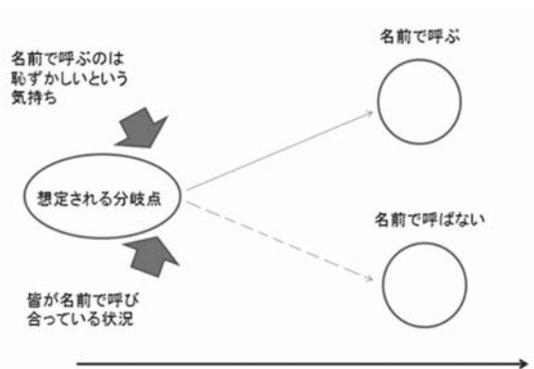


図4 分岐点の成り立ち

分岐点は、Aという方向に行くかBという方向に行くか逡巡のある状態であり、そうであれば、2つの異なる力が働いていると考えられる。分岐点を描けるような語りデータがあれば大変ありがたいが（たとえば、「〇〇くんを下の名前で呼ぶのが妙に恥ずかしかったのを覚えています」のような語りデータである）、必ずしもこうした

必要である。一見分からないものは、読み手に解釈の視点がないことを示すものであるから、逆説的に言えば、その分からない切片を十分に理解することができたなら、全体の理解が一気に進む場合がある。仮にある切片を使わないでおくのであれば、いざとなればその基準を論文の中で記述できるようにしておくことが望ましい。「関係のないものは除いた」ではなく、「本研究はインタビュー本人の経験に焦点を当てているため、インタビューの経験以外についての話は除いた」など、他者が読んでも納得いくような理由であるならば、除外もありうると理解されるだろう。

ことが語られるとは限らない。何回か繰り返しかえしインタビューをするのが望ましいというのも、こうした分析により、発見できた分岐点がどのように生じたのかを確認することが可能だからである。分岐点に働く力のうち、等至点に近づけるように働く力を社会的ガイド (Social Guidance: SG)、等至点から遠ざけるように働く力を社会的方向づけ (Social Direction: SD) と呼ぶ。

名前と呼ぶ、という経験の例に戻れば、こうした分岐点を経て名前を呼ぶことを行うことがほぼ全員に見られるようであれば、それを必須通過点として焦点化することも可能である。その時、特別に仲の良い友達を名字だけで呼び続けることはほぼ無いということ仮説することになる。

「最初はしゃべりにくい人だなと思った」と「最初からすぐに気があった」の例のように、たとえ縦の同じ列に並んでいても、背反する経験や異なる経験であれば、それぞれ別のラベルをつける。それは経験の多様性として考える必要があるからである。そして、この場合も少し前に分岐点があったのではないかと考えることが可能である。

この際に、各事象を上側と下側のいずれに配置するかについても考える。その TEM 図が、ある行動の傾向の増進と減退に関する図であれば、上に増進した事象、下に減退した事象を書くことで整理することもできる。たとえば、先の事例では、その友達との関係の深化を示す出来事の場合は上側に、その友達との関係の希薄化を示す出来事の場合には下側に布置することで全体が見通しやすくなる。

場合によっては、切片の内容を、そのまま径路として配置せず、分岐点にかかる力としての社会的方向づけや社会的ガイドのような形で TEM 図に下方向、上方向の矢印として書きこんだほうが良い場合もある。この際、情報を捨象することで見る人の理解を助けるのが TEM の目標

であるので、情報を捨象するのは必ずしも悪いことではない。しかし矢印にしてしまうことで、非常に単純化して、実際にはある時期に経験されるものを、まるで常に外部に存在しているかのように記述してしまう可能性があるため、そうならないように注意する必要がある。

## 2-6. 事象をつなぐ線を引き、両極化した等至点への線も引こう

等至点と両極化した等至点を配置した上で、それぞれのラベルの間を線で結ぶのが次の段階である。ここで、非可逆の時間を表す矢印を引くことも忘れないようにしたい。

様々な出来事を結ぶ線は何通りにも引けるだろう。その中で実際に径路を通った人がデータの中にいたら実線で線を引く。データの中にはその径路を通った人はいなかったが、実際にはいる可能性が想定できるなら点線で描く。同時に、ラベルを見渡して、データの中にはなかったが、経験としてあり得るものがあればそれを点線で囲んだラベルとして加え、同じく、点線でつなぐ必要性の有無を検討する。

TEMで両極化した等至点を作る理由は2つある。第1には、社会的な問題に関心を持って取り組む研究者は、ある特定の事象が達成されるということが好ましいという価値観や信念を抱いてしまっていることがあるので、これを避けるためである。第2に、質的研究では、多くの場合、「ある」ということにしか気づけないため、あるべきものが「ない」ということに気づくために、このような方法が取られている。

## 2-7. 個々人の変遷が十分追えるかを確認しよう

分析しているうちに、個々人の経験の流れとはかけ離れた分析になってしまうことがある。そのため、一通り TEM 図ができあがれば、個人の径路を辿り直して、過不足なくリアリティ

を含んでいるかを確認する必要がある。ここで、不全感が残るようであれば、分析をやり直すくらいの勇気が必要である。また、他の人にも見てもらい、説明がおかしくないか聞いてみるのも良い。

### 2-8. 論文にまとめよう

個々人の経験の変遷が追えているのを確認したら、TEM 図を清書する（図 5）。時間を追いながら、図にそって、ラベルを順にたどりつつ、それぞれ事例で描かれている経験が追体験できるように記述しよう。

### 3. まとめ

本稿では、TEM 図を具体的に書いてみる方法について紹介した。今回紹介した方法の特徴は 2-4 にあり「同じような経験を列に並べる」ことに焦点化した方法である。初めて質的研究

をする人が、頭の中で全体像を組み立てようとするあまり、自分に都合のいいデータだけを取り出してモデルを構築してしまいがちである。それに対してこの論文で提案した方法は、KJ 法をベースにしており、実際にデータを切り出し、並べたデータや付したラベルを視覚的に確認することを通じて、初めての人でも等至点や分岐点を同定していく感覚を体験できる。しかし、この方法は、「同じような経験を列に並べてラベルを考える」という手続きを踏んでいるために、より広く全体のダイナミズムを捉えるのに向いていないかもしれない。

さらに、そもそもこのように手順を開示することは学習者にとって良いことばかりではなく、危険が伴うことに注意を払う必要がある。なぜならば、形式だけは最低限度ある手法に従うことで、生きた現象や経験を捉えるという質的研究の本来の目的への意識が薄れることがあるからである。また、分析手法の「妥当性」を確保

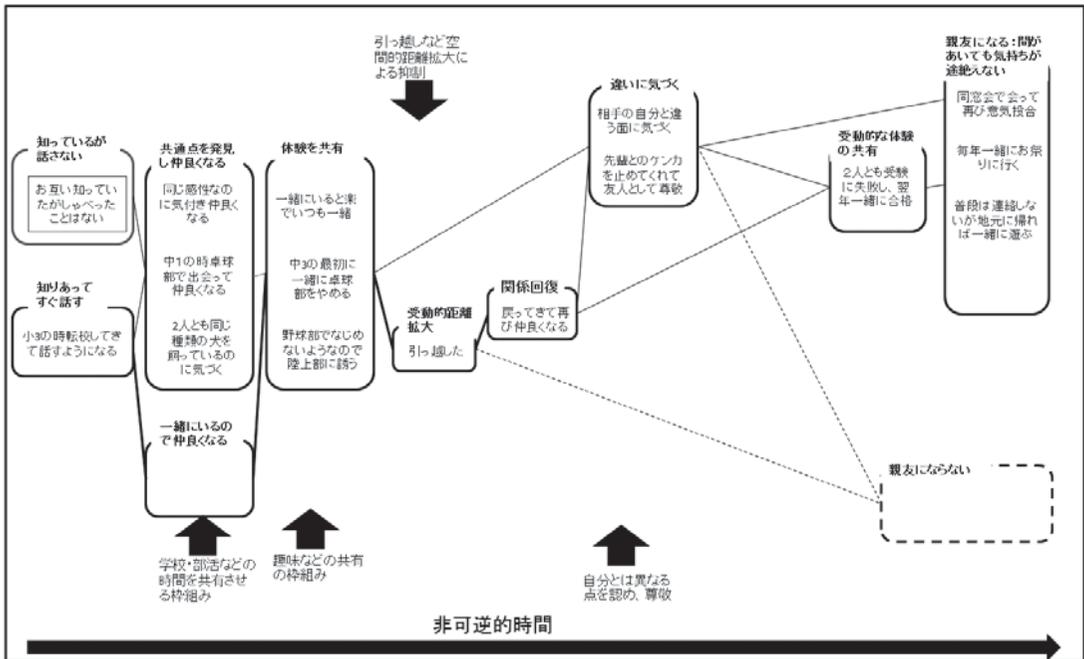


図 5 TEM 図 「ある人と親友になった過程」

したと考え、それを論文上で主張する研究が現れ、もっと悪いことに、それを承認する査読者も現れるからである。その結果、雑な研究が増えていく恐れが無いとは言えない。

質的研究法は自らが研究対象とする現象・経験の理解に向けて、「丁寧な分析と記述を目指す」ことが重要なはずである。従って、特定の方法に従い、それに従ったことでお墨付きを得たかのように吹聴することは何の慰めにもならず、丁寧さを目指してその手法を用いて行った現象の理解や記述が雑であれば、本末転倒の結果をもたらしかねない。このことは、もちろんTEMにもあてはまる。本稿では、TEMを用いた分析手続きを、順をおって開示してはいる。しかし、それは、最初に述べたように、TEMで分析するプロセスを体験する手がかりとなることを目的としてのことであり、本稿で紹介したものが、標準的な手続きであるわけでも、「正しい」やり方であるわけでもないことに、再度注意を促したい。

開示された手順を洗練させたり応用したりするのではなく、その手順通りにすれば質的研究であるとするような雑な研究が増えることを、質的研究の「手続き厳密化－論考粗雑化」パラドックス呼ぶことができるだろう。質的研究の手続き化による単線思考誘発（単線径路誘発）のパラドックスである。手順を学ぶ人たちは、このパラドックスに飲み込まれないようにしなければならない。そのためには、「丁寧な分析と記述を目指す」という本来的な目的を認識し、常にデータに戻る姿勢をもちあわせておく必要があるだろう。

また、今回の方法は、複数人を対象にしたものであるから、研究協力者が1人の場合は別の書き方になる。実際に歩んだ道については聴き取れるが、選択しなかった道を聴くのは本人が意識しないことが多いので難しいという実際の制約があるからである。他方で、研究協力者が

1人の方が、分岐点に働く様々な力を聴いたり描いたりするのは、より詳細にできるかもしれない。

最初に書いたように、TEM図に正しい書き方があるわけではない。TEMを自分のものにするための1つの足がかりとして、本方法を使っただけならば幸いである。TEM図は、気づきのためのツールであり、複雑な人生の時間の流れを、一旦手の平サイズにすることで、対象者への理解を深めるプレゼンテーションのツールである。何が「正しい」分析方法かを考えるのではなく、かつ自分が導き出したい結論に都合のいい研究方法として使うのではなく、自分の思い込みを相対化する、分析者外部の視点（現象や当事者、現場など）を取得しつつ、対象に対する理解を深めるという目的に照らして、分析し記述する方法を工夫することが求められる。

## 謝辞

本論文の執筆にあたり、匿名の2名の審査者の先生から重要な指摘を頂きました。ありがとうございました。

## 引用文献

- グレイザー, B & ストラウス, A. L. (1996) 「データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか」。新曜社。
- 川喜田二郎 (1967) 「KJ法—混沌をして語らしめる」。中央公論社。
- サトウタツヤ (2009) 「TEMではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして」。誠信書房。
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン=ヴァルシナー (2006) 複線径路・等至性モデル—人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して。質的心理学研究, 5, 255-275。
- サトウタツヤ・安田裕子・佐藤紀代子・荒川歩 (2011) インタビューからトランスビューへ—TEMの理念に基づく方法論の提案。日本質的心理学会第8

回大会プログラム抄録集, p70.

Valsiner, J. (2001) *Comparative study of human cultural development*. Madrid: Fundacion Infancia y Aprendizaje.

Valsiner, J. & Sato, T. (2006) Historically Structured Sampling (HSS): How can psychology's methodology become tuned in to the reality of the historical nature of cultural psychology?. J. Straub, C. Kölbl, D. Weidemann, & B. Zielke, (Eds.) *Pursuit of meaning: Advances in cultural and cross-cultural psychology*.

Bielefeld: Transcript Verlag.

安田裕子 (2005) 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程—治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から. 質的心理学研究, 4, 201-226.

安田裕子・荒川歩・高田沙織・木戸彩恵・サトウタツヤ (2008) 未婚の若年女性の中絶経験—現実的制約と関係性の中で変化する, 多様な径路に着目して. 質的心理学研究, 7, 181-203.

(2011. 12. 19 受稿) (2012. 4. 2 受理)

